



三条北ロータリークラブ週報



No. **18**

R I : マーク・ダニエル・マローニー会長「ロータリーは世界をつなぐ」
 第 2560 地区 : 大谷光夫ガバナー「楽しいロータリーでつながろう」
 三条北ロータリークラブ : 外山裕一会長「ロータリークラブでより多くの仲間作りを！」

会長 : 外山裕一 幹事 : 羽賀一真 S A A : 梨本文也

●例会日 : 火曜日 12:30~13:30 ●例会場 : 三条ロイヤルホテル TEL 0256-34-8111

◆本日の行事:

「外部卓話」

◆本日の出席 : 59名中30名

◆先々週の出席率 : 59名中49名 83.05%
(前年同期 85.71%)

◆本日のゲスト

貞観堂、新・古美術

店主 渡辺 貞夫 様

◆先週のメイクアップ(敬称略)

11/19 親睦活動委員会

松山浩仁、石川一昭、坂内康男
 本田芳久、梨本文也、中山正義
 宮川雄一郎

11/19 分水 RC 岡田 健

11/21 加茂 RC 石川勝行、岡田 健

11/23 村上岩船 RC 20周年記念式典
 外山裕一、本田芳久

*本日の配布書類等

- ・週報 No.1570
- ・ガバナー月信 11月号(閲覧)

会長挨拶 : 外山裕一 会長



皆さんこんにちは。先週の23日土曜日に、村上岩船ロータリークラブの20周年記念式典に、羽賀幹事が欠席されたので本田副幹事と私で行って参りました。クラブ会員は28名で少なめなクラブですが、工夫をされた企画で、これはこれでまるではないかという風に思いました。本日の行事ですが、外部卓話の「こっとう夜話」貞観堂店主の渡辺貞夫様よろしくお願ひします。以上、会長挨拶を終わります。

幹事報告 : 羽賀一真 幹事

- ・佐藤ガバナーエレクトより、次年度クラブ会長幹事予定者についての照会
- ・新潟南 RC より、創立60周年記念式典・祝賀会ご臨席の御礼
- ・三条ローターアクトクラブより、「11月第二例会」のご案内
 日時 : 11月28日(木)19:30~21:00頃
 会場 : 三条・燕地域リサーチコア 4F



「Every Rotarian, Every Year」クラブ
 100%ロータリー財団寄付クラブ

ロータリー財団よりバナー表彰



一人あたり平均寄付額 100ドル以上のクラブに表彰

12月のお祝い



会員 誕生日	ご夫人 誕生日	結婚記念日
田口実仁佳	今井 房子	佐藤 義英・ミチ子
佐藤 秀一	山崎八重子	加藤 實・満寿子
渡辺 徹	渋谷 朋子	斎藤 正・裕子
	米山由貴江	



ロータリー財団 BOX

26日現在累計 99,000円

- 石川 一昭 君 吉田文彦さん県知事賞受賞おめでとうございます。
北RCのホコリ(アカではありません)です。
- 星野 義男 君 12月1日(日曜日)新潟へロータリー財団午餐会に出席してきます。
ごちそうを食べてきます。



米山奨学 BOX

26日現在累計 188,000円

- 吉田 文彦 君 米山奨学会に協力します。
- 渋谷 義徳 君 今週も米山の席です。奨学BOXに協力します。
- 森 宏 君 協力します。
- 石黒 隆夫 君 米山梅吉は15才の時、もっと学びたいという気持ちで三島の米山家に黙って家を出て東京へ向かいました。

スマイル BOX

26日現在累計 448,000円

- 外山 裕一 君 貞観堂店主渡辺貞夫様、本日は宜しく申し上げます。
- 羽賀 一真 君 貞観堂渡辺貞夫様、本日はよろしくお願ひいたします。
- 石川 友意 君 貞観堂渡辺様の卓話に感謝して!!
- 早川 瀧雄 君 貞観堂の渡辺貞夫様、卓話宜しく申し上げます。
- 金子太一郎 君 貞観堂の渡辺様、こっとうの話、楽しみです。
- 中原 尚彦 君 貞観堂渡辺貞夫様、本日の卓話、よろしくお願ひします。
- 吉田 文彦 君 ちょっといいことがあったので、いつもより少しだけ多くボックスに協力します。
- 森 宏 君 天気が良く、気持ち良いので1口。
- 石川 一昭 君 本日26日は丸山勝君の誕生日、明日27日は岡田大介くんの誕生日。二人合わせておめでとうございます。丸山勝君は70才です。ゴルフはシルバーティーからですよ!!
- 佐藤 義英 君 BOXに協力!!
- 梨本 文也 君 //
- 高橋 彰雄 君 //
- 落合 益夫 君 //
- 齋藤孝之輔 君 //
- 花井 知之 君 今日も御協力ありがとうございます。



社会奉仕事業 特別BOX

26日現在累計 186,000円

本日の行事：「外部卓話」

講師紹介：中原尚彦プログラム委員長



今日の外部卓話は、貞観堂の渡辺貞夫さんをお願いをしました。私は古書の仕事を始めて7、8年くらいになりますが、古書籍商組合に所属しながら日々営業しております。渡辺さんは骨董本筋の骨董商の組合に所属されています。お店は第二産業道路、さる一んさんのお店の並び石上よりに少しいったところに看板が出ておりますが、道路を走っていても看板が見えない位置にあり、ちょっと引込んだ所にお店が見えます。私個人的には骨董も含めて、非常に勉強させていただいております。本日は「こっとう夜話」ということでお話しいただきます。宜しくお願ひします。



「こっとう夜話」

貞観堂、新・古美術 店主 渡辺 貞夫 様

皆さん、こんにちは。
この度はこのような会にお呼び頂きまして、誠にありがとうございます。短い時間ではございますが、お付き合いをお願い致します。

骨董屋と言われても漠然と古い物を売ってんだらうという風にお考えの方もいらっしゃるかもしれませんが、意外に組織的に分かれております。まず始めに、主にお店で品物を売る「店師」。競会(せりかい)だけで商売をする「果師(はたし)」。店を持たずに自分の家へお客を招き入れる「客師」。簡単に言うと茶道具屋さんがその例です。骨董屋や茶道具商から品物を借りて売り歩く「白足袋さん」「白手袋さん」。私はこの中の「店師」になります。今年で32年になりました。

骨董の董の字は草冠に重いと書きます。元々中国の言葉で、数寄者(すきしゃ)により古くから代々大事に伝わってきた物という意味が「董」の字に含まれています。日本では「骨董」ですが中国では「古董」と書く場合もあります。

骨董品とは、どの範囲の物なのかというと、大まかに全世界共通で「100年以上経ってる物」とされています。書画掛軸では、「古書画」と明治以降の「新画」に分かれています。焼物も絵もそうですが、明治以降から、箱の蓋の裏側に作家の名前と印のある「共箱(ともばこ)」と言いますが、作家意識が強くなりました。

骨董屋と言われるのは、明治を過ぎて大正以降の事です。それまでは「道具屋さん」という言葉であり、主に茶道具屋さんのことを指していました。それと「書画屋さん」。焼物(鑑賞陶磁器)が案外遅く、戦後に鑑賞陶磁器という世界が出来上がりました。

骨董屋の世界では、仕入れが一番大事になります。二つと無いものを売っていますので、注文して取り寄せることができません。仕入れは「競会」「オークション」「お客様から直接譲っていただく」、そういう所で成り立っています。「競会」と「オークション」の大きな違いは何かと言いますと、「オークション」は一般の方も参加でき、尚且つ始まる前に出品される図録を見ることができのに対し、「競会」では何が出るか全くわからず、当日、目の前をお盆にのった品物が回って来ますが、見る時間は数秒しかありません。その数秒で傷の有無、偽物か本物か、瞬間で全てを判断し買うような形で仕入れをしています。掛軸においては、会場の真ん中で広げ、数秒で決まります。東京の会で50万円から始まり1億2000万円まで10秒かからずに決まったことがありました。瞬間で判断をし、買う。大きく言うとギャンブルのようですが、ちょっと失敗したらゼロにはならないながらも、大分評価の低いものになってしまいます。そんな世界で生きております。そういう特殊な

世界なので、一般のお客さんはついて来られません。オークションにおいてはオークション会社が品物を保証しておりますが、日本の競会においては、何の保証もありません。偽物だろうが買った方が悪い、切った張ったの世界で私も32年です。よく言われるのが、「プロの一日、お客さんの一年」。僕がよく行く大きな競会では、4000点を2日に分けてするんですが、前の日に下見をします。しかし、下見にしても4000点全部見れるものではないので、ぱーっと流し見て、目に留まるものだけ手に取り確認します。競会を迎え、現在の相場を見ながら商売をしています。僕らの骨董屋商売の形態は古いと思われるがちですが、実はものすごく経済に敏感です。考えてみれば、骨董は生活に不要なものです。しかし、趣味やそういった満足させるためのものがなければ、人生寂しいじゃないかと思うのです。

品物にはレベルがありまして、例えば伊万里焼という物がありますが、元禄時代1680年のものでも、下手(げて)のものとして上手(じょうて)のものがあります。コレクションというのは古くても下手の物ばかりでは何なりません。やはり上手のものを買うことで、結局、品物にお客さんも成長させてもらい、品物もそのお客さんによって成長させられると、そういう風な感覚で僕は思っております。

それから、終活についてよく相談を受けます。でも終活の整理が終わった後にお話を受けます。こんなもんがあったなんて写真を見せられますが、処分後です。僕らからすれば、全て骨董品です。先々代が持っていたもので、邪魔だったからと言われます。僕も残念で仕方ない思いです。僕ら骨董屋は、常にお客さんの家に行ったら商売しなければという感覚はなく、私だけかもしれませんが、折角のものを捨てるのは惜しいという思いだけです。古いものはなくなる一方ですから、大事にして後世に繋げていくような仕事をしていかなきゃならないと思っております。

僕らの骨董屋の仕事とは何かと考えますと、まず初めに、骨董を勉強しているお客さんに見かたや時代背景を教えてあげる事があるかと思えます。以前、彦根の骨董屋さんに飛び込んだ時に、抹茶道具があり、茶入れというものがありました。それはお点前(てまえ)の際にまずお茶を入れて、お湯を入れるのですがこれは何ですか？とお聞きしましたら、「これは面白いもんだ。お茶って非常に良くて、飲んで薄かったらそれで足せるんだ」と、全く作法と違う事を言われました。これは面白いなと思い、水指(みずさし)を指してこれは何に使うんですか？と聞くと、「熱かったら水をうめて飲むもんだ」と言うのです。全く間違った説明です。僕からすれば茶道を知らない人だと思わけるわけですが、別のお客さんには、理路整然といかにももったいぶった説明をしてい

るんです。
その骨董屋さんの力量もある程度、お客さんは知らないきゃならないという事です。それには何がいかと言うと、その店にない品物について質問をする事です。そうすると、とんでもない答えだったり、うやむやな答えが返ったりします。やはり、僕らは古いもの売る以上、自分の持っている商品だけでもきちりとした説明ができなければダメだという思いで、僕は立っております。

また競会の話に戻りますが、特殊ないい競会は別にして、だいたい贋物偽物のオンパレードです。その中で、本当に偽物を作ろうとして作ったものと、真面目に作ったが出来が良く、昔のものに似せてわざと汚して古そうに見せ贋物になってしまうものとあります。僕らが排除したいのは、その悪意をもって偽物を作る人達です。僕は備前焼が好きで、備前焼だけでも何人もの贋物名工を知っています。その作品を見ると、誰の作か分かるぐらい勉強しました。僕は買ってから改めて勉強します。知識はありますが、もう1回本を開き、欲しいお客さんと一緒に話をします。不思議なもので、骨董品は、「僕、偽物ですよ」と言ってる部分があります。皆さんも経験あるかと思いますが、「本物だ!」と思った瞬間「僕、偽物ですよ」と言ってる部分を見逃すんです。基本的に僕らは、いいもんだろうなと思っても、初めに偽物として気持ちが入るんです。手に取って見るのは「偽物なんだろうけど、よく出来ているね」と見て、その後判断します。

例えば、これはどこの家でもある柳文徳利で、実はこれは贋物です。本物は時代的には1670年代ぐらいのものですが、これは昭和40年代に作られたものです。何が違うか、まず土が違う。焼物を焼く窯は薪や土が無くなると移動します。その時代には必ずこの土を使ってるという研究がされています。そのため一目瞭然です。見慣れてくると、偽物は何か形が鈍い、でも本物はスツとしています。



この彩り、結構斬新なもので、白・金・青・緑。初見、現代ものかなと思いました。よく見ると1700年初めぐらいの古伊万里です。土がその時代のもので、この染付がその時代のものであります。僕からすると、ものすごくしゃれていて、今でも通用するような絵柄です。僕が思うに、焼物の形・色付・デザインにおいて、すべて江戸時代で終わってると思います。今の作家さんたちはそれをどうやって自分たちのものにしていくかということで苦労してるんじゃないかなと思う次第です。

物の見かたの話をしますと、これはご存知かと思いますが、佐渡の三代琢斎の花入れです。図柄はすすきと雁が飛んで月が出ているもので、今の季節のもので、三代琢斎といえども何がいか、やはり初めは図柄、それと紫藤(しどう)と言われる紫の色。

これは金が混ざっているため、金から出る色です。発色の具合など、名品かどうかの決め方があり、それをしっかり分かっていると、良いものが手に入る場合があります、同じ金額でも少しでも良いものが買えるようになると思います。ちなみに三代琢斎の場合、龍の耳が付いているものが、一番レベルが高いと言われてます。

骨董をお求めになる際は、そういったことを聞くと教えてくれる骨董屋さんがありますので、たくさんお話しになってお求めになられた方が良いと思います。



ちなみにこれが琢斎の箱ですが、これは残念ながら五代の琢斎が三代の琢斎の作品ですよと極めをしている極箱(きわめばこ)になります。この箱があるかないか、本人が作った証明があるかないかで、だいぶ金額が違ってきます。

これは今から1000年くらい前の中国の南宋時代に作られた宋白磁(そうはくじ)と言われているもので、世間相場が実は15万円前後のもので、ところがこれは肌がくすんでいます、これが真っ白になると30万円、40万円になります。ちょっとした違いで値段が変わってくる、これが骨董の怖いところです。なぜかと言うと白磁ですから、白が良いに決まっています。濁っていたのでは、白磁とは言いつらいってことです。「その品物は何を望んでるのか」というものを的確に捉えることで、良いコレクションができるのだらうと思います。

骨董品とはそもそも、書画を抜けた場合、ほとんど生活の什器ですが、今には持てない雰囲気というので、骨董品として鑑賞用のものになってきています。

次にこちらは、五十嵐霞亭と言いまして、三条の江戸時代後期の作家です。八幡に住んでいて、亡くなったのは幕末頃だと思います。そして、これが岩田正巳さんの字です。正巳拝観と書いてあります。非常に岩田正巳先生は字が上手いです。鷹がいて、鳥がいて、これはなかなかの大作で霞亭の中でも何本指かに入る物だと思います。ここに小鳥がいますが、鷹が小鳥を狙ってる絵ではなく、小鳥が誰かに狙われないように見ている、これは中国の故事にある話でそれを演じます。一つの名品でございます。



まとまりがない話になってしまいましたが、お時間もきたようなので、この辺で終わります。もっと喋りたい事もありましたが、皆さんの顔を見てますとすごく緊張しまして、考えてることと全く別なこと言い出したりしますので、ご勘弁願いたいと思います。ありがとうございました。